

都道府県別賞一等

命の恩人

京都府 京都教育大学附属京都小中学校 三学年

太田 もゆ

二年前の日曜日のこと、父が突然、心臓の疾患を患った。救急車で運ばれ、そのまま緊急手術となった。その前日まではいつものように私をからかっていた父が生死をさまよう病気になったことは本当に信じられなくて他人事のようなだった。病院の先生から、病院に運ばれてくる間に亡くなる人や、手術中に亡くなる可能性の高い病気だという説明を受けた。この言葉を聞いた時、背筋が凍った。神様どうか父を助けてください。それを祈るしかなかった。

手術開始から三時間後、看護師さんから母に数秒ほどの声が流れてきた。「手術が終了したので、集中治療室にお越しください。」と言う呼び出しの電話だった。緊張が走り、家族で手をつなぎながらそこまでゆっくりと歩いていった。心臓が今まで聞いたことのない音で鼓動していた。

集中治療室の前に着いた。しかしそれから三十分。まだ父が手術室から出てこない。父が運ばれてくるはずのエレベーターの表示も止まったまま。何か緊急事態でも起こったのだろうか。まさか、手術が失敗したのだろうか。悪いことばかりを想像し、目の前が真っ暗になりかけていた。するとエレベーターの表示が動き出した。固唾を吞んで降りてくるエレベーターを待った。

医師や看護師とともに一台のベッドが出てきた。父だ。

いくつものチューブでつながれた父は麻酔で眠っているが、生きている！その顔を見た瞬間、大粒の涙が溢れ出てきた。世界でたった一人の大好きな私の父が生きて帰ってきたと。神様は私たちに味方をしてくれた。感謝しかなかった。父は麻酔から覚めて、体調が整うまで集中治療室に入ることになった。

手術から五日後、父は目を覚ました。やせ細った姿だった。胸には巨大ミミズのような手術痕が残っていた。そのまま順調に回復し一カ月で退院することができた。

神様と医師が父を助けてくれたのだが、もう一人助けてくれた命の恩人がいる。それは生命保険会社の健康相談ダイヤルというものだ。

病院の開いていない日曜日に、父の異変にどうすればいいのかわからなかった母が、保険会社の健康相談ダイヤルに電話をかけ症状を説明した。そうすると、「今すぐ救急車を呼んでください。」と教えてもらえた。そのため救急車を呼びすぐに病院で診てもらったことができたのだ。

もしあの時母がその電話をかけていなかったら、もし生命保険に入っていな

第62回中学生作文コンクール

かったら、どんな結果になっていたかわからない。

私は生命保険は死んだ時にももらえるお金のためだけのものだと思っていたので生きている人には関係ないと思っていた。

生命保険は、名前の通り「命」を助けてくれるということを知った。

これからもよろしくお願いします、生命保険。